

ゲルマン語動詞系列第7類の起源に関する一考察 ——トカラ語との比較において——

齋藤 治之

I. 序論

ゲルマン語の動詞強変化 (starke Konjugation, → starke Verben) においては、パターン化された母音交替 (Ablaut) に基づく母音交替の系列 (Ablautreihe) が見られ、強変化動詞は語根の音韻的環境の違いにより I 類から VII 類の 7 系列に分類される (不定詞、単数過去、複数過去、過去分詞の順およびカッコ内左はゴート語、右は古高ドイツ語) :

- I. CeiC- (CeiC-, CīC-) : CoiC- (CaiC-, CeiC-) : CiC- : CiC- (got. greipan, ahd. grīfan (nhd. greifen) : graip, greif : gripum, griffum : gripans, gigriffan)
- II. CeuC- (CiuC-, CioC-) : CouC- (CauC-, CouC-) : CuC- : CuC- (got. biudan (nd. bieten), ahd. biogan (nhd. biegen) : baup, boug : budum, bugum : budans, gibogan)
- III. CeRC- (Ci/eRC-, Ci/eRC-) : CoRC- (CaRC-) : CuRC- (Cu/oRC-, CuRC-) : CuRC- (Cu/oRC-, CuRC-) (got. wairpan, ahd. werfan (nhd. werfen) : warp, warf : waúrpum, wurfum : waúrpan, giworfan)
- IV. CeR- (Ci/eR-, CeR-) : CoR- (CaR-) : CēR- (CāR-) : CuR- (got. niman, ahd. neman (nhd. nehmen) : nam, nam : nēnum, nāmum : numans, ginoman)
- V. CeC- (CiC-, CeC-) : CoC- (CaC-) : CēC- (CēC-, CāC-) : CeC- (CiC-, CeC-) (got. giban, ahd. geban (geben) : gaf, gab : gēbum, gābum : gibans, gigeban)
- VI. CoR- (CaR-) : CōR- (CuoR-) : CōR- (CōR-, CuoR-) : CoR- (CaR-) (got.

slahan (nhd. schlagen), ahd. faran (nhd. fahren) : slôh, fuor : slôhum, fuorum :
slahans, gifaran)

- VII. Coi/ou/o/eh₁C- (CeīC-) : CēC- (CiaC-) : CēC- (CiaC-) : CoiC- (CeīC-) (got.
haitan, ahd. heizan (nhd. heißen) : haīhait, hiaz : haīhaitum, hiazum : haitans,
giheizan)

上記の表の中で I 類から III 類の 3 系列は語根が *-e-* 階梯 (不定詞) で CeīC-,
CeuC-, CeRC-, *-o-* 階梯 (過去単数) で CoiC-, CouC-, CoRC-, ゼロ階梯 (過去複数、
過去分詞) で CiC-, CuC-, CRC- となり、それぞれゲルマン祖語の CīC-, CeuC-,
CeRC-; CaiC-, CauC-, CaRC-; CiC-, CuC-, CuRC- を通じてゲルマン諸語へと至っ
ている。このように規則的な語根母音の交代による動詞カテゴリーの形成は他
のインド・ヨーロッパ語においても観察される。その代表の一つとして中央ア
ジアで 8 世紀頃まで使用されていたトカラ語を挙げることができる。この言語
では“現在—接続法—過去—過去分詞”が同じ語根に基づく系列 (Averbo) を
形成し、その系列は各動詞カテゴリーの連結方法に基づいて下記 (4 節) の
表のように多くのグループに分類される。その中でゲルマン語の I 類から III
類の系列に対応するのが CeīC-, CeuC-, CeRC- という音韻構造を有する語根の
動詞カテゴリー系列 (Averbo) である。例えば B *lip* “übrigbleiben”, B *tsu* “sich
fügen”, B *märs* “vergessen” のような Ce(i/u/R)C- という音韻構造を有する語根
がそれぞれ *lipetär/tswetär/märsētär* (現在 III 類) — *lipätär/märsam* (接続法 V 類)
— *lipa/tsuwa/märsäre* (過去 I 類) — *lipau/tswau/märsau* (過去分詞 I 類) という
具合に現在 III 類—接続法 V 類—過去 I 類—過去分詞 I 類という系列を示し、
lipa/tsuwa/märsäre (過去 I 類) および *lipau/tswau/märsau* (過去分詞 I 類) はゲ
ルマン語の I 類から III 類と同様に Ci/u/RC- というゼロ階梯を示している。ゲ
ルマン語の場合、過去複数、過去分詞のゼロ階梯語幹はインド・ヨーロッパ祖

語の完了 (Perfekt) 語幹に遡ると考えることも可能であるが、完了 (Perfekt) とアオリスト (Aorist) が融合して出来た過去 (Präteritum) 語幹と捉えることもできる。ゲルマン語では以下のように過去複数1人称で完了とアオリストが同じ形となることから融合が生じたと考えられている¹：

*leit- “(weg)gehen”

Sg.1. *laiþ(a) < *(le-)loith₂a Pl. 1. *liðume < *(le-)litme / ***litme**

2. *laist(a) < *(le-)loitth₂a 2. *liðude ← *(le-)litte

3. *laiþ(e) < *(le-)loite 3. *liðun < ***litpt**

(太字はアオリスト形)

ゲルマン語の強変化動詞は第6類、第7類以外はすべて不定詞 (= 現在語幹) が -e- 階梯を示すが、不定詞の語幹母音が -o- 階梯でテーマ母音 -e-/o- を示す動詞のクラスはゲルマン語強変化第7類とトカラ語に共通する特徴である。本稿はこれら両語派に共通する動詞形式の起源を探ることを目指している。

2. トカラ語における現在語幹と現在第3類・4類の特異性

トカラ語においても上述のインド・ヨーロッパ祖語のアオリストと完了の過去への融合により時制の語幹は現在、過去の2語幹に簡略化されている。現在語幹および過去語幹には以下の類が存在する：

1) 現在語幹：現在形 (Präsens) は次の12のタイプに分類される

1. Prs.I：テーマ母音によらない現在形：(Sg.3 A *pālkās*, B *palkām* < **b^hleg-*)

2. Prs.II：テーマ母音による現在形：(Sg.3 A *ākeñc* (3.Pl.), B *āsām* < **h₂eg-e/o-*)

3. Prs.III：*e(a)* 現在形：(Sg.3 A *wikatār*, B *wiketār* < **uig-o-*)

4. Prs.IV：*o(a)* 現在形：(Sg.3 A *aratār*, B *orotār* < *urtoch*. **ār-æ-* < **h₂orH-o-*)

5. Prs.V：*ā* 現在形：(Sg.3 A *swās*, B *suwam* < **giuh₂-*)

6. Prs.VI : *nā* 現在形 : (Sg.3 A *pällāntār* (3.Pl.Med.), B *pällātār* < urtoch. **pāl-nā-tār* < **(s)pl-n-H-*)
7. Prs.VII : *n* 現在形 : (B *kättankām* < **d^hg^{uh}-n-h₂-*, A *kätkanam* (Prs.VI))
8. Prs.VIII : *s* 現在形 : (Sg.3 A *aräs*, B *ersäm* < **h₃er-se/o-*)
9. Prs.IX : *sk* 現在形 : (Sg.3 B *wāskässām* < **u(a)g^h-skē/o-*)
10. Prs.X : *nāsk* 現在形 : (Sg.3 *tāmnāstār*, B *tānmastār* < urtoch. **tām-nāsk-*)
11. Prs.XI : *sāsk* 現在形 : (Sg.3 A *oksisam*, B *auksässām* < urtoch. **āuk-sāsk-*)
12. Prs.XII : *ññ* 現在形 : (Sg.3 B *māntam*, *māntaññem* (3.Pl.) < **mnt-ñh₂-io-*)

トカラ語の現在語幹の中で第3類・4類は態および語幹の形成に関して他の類とは大きく異なっている。態についてはこれらの類には中動態しか存在せず、また語幹については語幹形成母音がすべて -o- を示している。これら二つの類の形とインド・ヨーロッパ祖語の推定形を挙げると以下ようになる：

第3類

AB *māsk* “在る、存在する” (< proto.toch. **mānskœ-* < ide. **mṣk̥-o-*)

中動態のみ

B		A	
単 1 <i>māskemar</i>	複 1 <i>māskemt(t)är</i>	単 1 <i>māskamār</i>	複 1 <i>māskamtār</i>
2 <i>māsketar</i>	2 <i>māsketār</i>	2 <i>māskatār</i>	2 <i>māskacār</i>
3 <i>māsketār</i>	3 <i>māskentār</i>	3 <i>māskatār</i>	3 <i>māskantār</i>

B	A
単 1 <i>māskemar</i> (< <i>*mānskœ-mārä</i> < <i>*mṣk̥-o-mh₂(e)r</i>)	<i>māskamār</i> (=B)
2 <i>māsketar</i> (< <i>*mānskœ-tārä</i> < <i>*mṣk̥-o-th₂er</i>)	<i>māskatār</i> (=B)
3 <i>māsketār</i> (< <i>*mānskœ-tārä</i> < <i>*mṣk̥-o-tṛ</i>)	<i>māskatār</i> (=B)

複 1 mäskennt(t)är (< *mänskœ-mätär < *m̥nsk̥-o-med^hh₁r̥) mäskenntär (=B)
 2 mäskenntär (≡ *mänskœ-t'ärä < *m̥nsk̥-o-d^her) mäskenntär (=B)
 3 mäskenntär (< *mänskœ-ntärä < *m̥nsk̥-o-nt̥r̥) mäskenntär (=B)
 (cf. Essivtheorie: *m̥nsk̥-h₁je/o-mh₂r/ -th₂r/ -t̥r̥)

第4類

AB yāt “出来る” (< pr.toch. *yātœ- ≡ < ide. *iōt-o-)

中動態のみ

B

A

単 1 yotomar	複 1 yotomt(t)är	単 1 yatmār	複 1 yatamtär
2 yototar	2 yototär	2 yattär	2 yatacär
3 yototär	3 yotontär	3 yatatär	3 yatantär

B

単 1 yotomar (< *yātœ-märä ≡ *iōt-o-mh₂(e)r)

2 yototar (< *yātœ-tärä ≡ *iōt-o-th₂er)

3 yototär (< *yātœ-tärä ≡ *iōt-o-t̥r̥)

複 1 yotomt(t)är (< *yātœ-mätär ≡ *iōt-o-med^hh₁r̥)

2 yototär (≡ *yātœ-t'ärä ≡ *iōt-o-d^her)

3 yotontär (< *yātœ-ntärä ≡ *iōt-o-nt̥r̥)

A

単 1 yatmār (< *yata-mār < *yātœ-märä ≡ *iōt-o-mh₂(e)r)

2 yattār (< *yata-tār < *yātœ-tārä ≤ *īot-o-th₂er)

3 yatatār (< *yātœ-tārä ≤ *īot-o-tr)

複 1 yatamtār (< *yātœ-mātār ≤ *īot-o-med^hh₁r)

2 yatacār (≤ *yātœ-t'ārä ≤ *īot-o-d^her)

3 yatantār (< *yātœ-ntārä ≤ *īot-o-ntr)

(*-ā-œ- > B -o-o-, A-a-a-, cf. Essivtheorie²: *īot-h₁ie/o-mh₂(e)r/ -th₂er/ -tr)

すでに述べたように、現在第3類、第4類は中動態に限定され、語幹形成母音はすべて -o- である。語幹の母音階梯はそれぞれゼロ階梯と -o- 階梯である。前者の場合は現在形は音韻法則に従って求めることができるが、後者第4類の場合は規則通りに発展した場合、トカラ語 B の単数形を例にとると、下記のように実際に現れる形を導くことは困難である（不等号の下のイコールは非規則的發展を示す）：

B

単 1 yotomar (< *yātœ-mārä ≤ *yœtœ-mārä < *īot-o-mh₂(e)r)

2 yototar (< *yātœ-tārä ≤ *yœtœ-tārä < *īot-o-th₂er)

3 yototār (< *yātœ-tārä ≤ *yœtœ-tārä < *īot-o-tr)

つまり、現在形を導くには *yātœ-mārä ≤ *yœtœ-mārä という具合に、トカラ祖語において現在語幹には本来属さない -ā- という母音を設定しなければならない。その場合 -ā- は過去あるいは接続法語幹 *yātā- < *īot-H- に由来すると考えられる。

3. トカラ語における過去語幹

1) 過去語幹：過去形 (Präteritum) には次の6種類が存在する

1. Prt.I (過去第1類) (AB *kärs* “wissen” - Prt.Sg.3 A *šärs*, B *šarsa* “wusste”
 <*(s)kers- (語根アオリスト))

Toch.A

Toch.B

Sg.1 <i>šärsā</i> <*(s)kers-	Pl.1 <i>krasamäs</i> <*(s)kros-	Sg.1 <i>šärsāwa</i>	Pl.1 <i>šärsām</i>
2 <i>šärsāst</i>	2 <i>krasas</i>	2 <i>šärsāsta</i>	2 <i>šärsās</i>
3 <i>šärs</i>	3 <i>krasar</i>	3 <i>šarsa</i>	3 <i>šärsäre</i>

2. Prt.II (過去第2類) (AB *kärs* “wissen” - Prt.Sg.3 A *šašärs* “ließ wissen” $\leq$ *ske-skors-*, B *šarsa* <**skērs* あるいは **ske-skors-*)³

3. Prt.III (過去第3類) (A *prak*, B *prek* “fragen” - Prt.Sg.3 A *prakäs*, B *preksa* “fragte”
 <**prē/ok-s-* (s アオリストおよび完了))

Toch.A

Toch.B

Sg.1 <i>prakwā</i> <* <i>prē/ok-s-</i>	Pl.1 <i>prakmäs</i>	Sg.1 <i>prekwa</i> <* <i>prē/ok-s-</i>	Pl.1 <i>prekam</i>
2 <i>prakāst</i>	2 * <i>prakäs</i>	2 <i>prekasta</i>	2 * <i>prekas</i>
3 <i>prakäs</i>	3 <i>prakār</i>	3 <i>preksa</i>	3 <i>prekar</i>

4. Prt.IV (過去第4類) (A *winās*, B *wināsk* “verehren” - Prt.Sg.3 A *wināsā-m*, B *wināssa* “verehrte”)

5. Prt.V (過去第5類) (AB *we* “sagen” - Prt.Sg.3 AB *weñā* “sagte”)

6. Prt.VI (過去第6類) (B *kām* “kommen” - Prt.Sg.3 B *šem* “kam”, B *länt* “hinausgehen”)

- Prt.Sg.3 B *lac* “ging hinaus”)

4. トカラ語における動詞系列 (Averbo)⁴

動詞系列とは同一語根から形成される〈現在形－接続法形－過去形－過去分詞〉の系列を指す。以下の図において中心的位置を占める接続法形と現在・過去・過去分詞形の対応は次のように様々である：

Konj.I B *cesäm* (Prs.II) - *tekäm* (Konj.I) - *teksa* (Prt.III) - *tetekor* (P.P.III
(Subst.))

B *ersam* (Prs.VIII) - *ertär* (Konj.I) - *ersate* (Prt.III) - *eru* (P.P.III)

B *enkastär* (Prs.IX) - *entär* (Konj.I) - *ensate* (Prt.III) - *enku* (P.P.III)

Konj.II B *klyausäm* (Prs.II) - *klyausäm* - (Konj.II) - *klyausa* (Prt.I) - *keklyausu*
(P.P.I)

B *triksäm* (Prs.VIIIb) - *trisäm* (Konj.II) - *traiksa* (Prt.III) - *tetrikü*
(P.P.III)

Konj.V⁵ B *triketär* (Prs.III) - *trikalñe* (Konj.V (Subst.)) - *trika* (Prt.I) - *trikau*
(P.P.I)

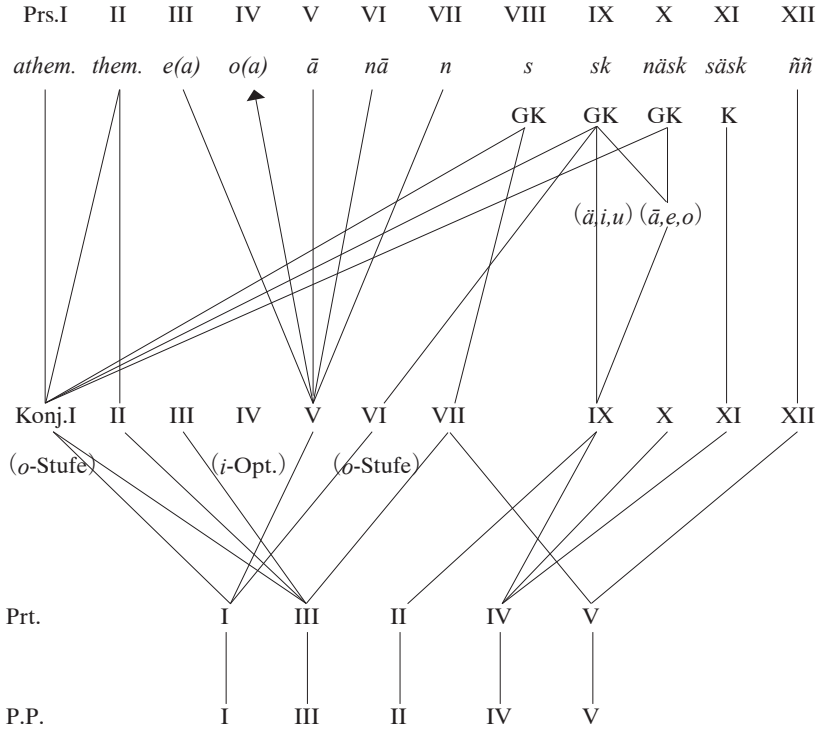
B *korpotär* (Prs.IV) - *kārpam* (Konj.V) - *karpāsta* (Prt.I) - *kakārpau* (Prt.
I)

B *kārsanatär* (Prs.VI) - *kārsam* (Konj.V) - *sarsa* (Prt.I) - *kārsau* (P.P.I)

Konj.VI B *kālpāskau* (Prs.IX) - *kallam* (< **kalnam*) (Konj.VI) - *kalpa* (Prt.I) -
kālpau (P.P.I)

Konj.VII B *wessäm* (Prs.IX) - *weñau, wem* (Konj.VII) - *weña* (Prt.V) - *weweñu*
(P.P.V)

Konj.IX B *sarsässām* (Prs.IX) - *sarsässi* (Opt. (< Konj.IX)) - *sārsa* (Prt.II) - *ses-sarsu* (P.P.II)



(G: Grundverb, K: Kausativ)

上記の図が示すように、現在形、接続法形、過去形、過去分詞形の対応の中、現在第3・4・5・6・7類—接続法第5類—過去第1類—過去分詞第1類という系列がこの系列に属する動詞数の観点から他の系列に比べ優位に立っている。

この中で、本稿第2節で述べた現在第4類と接続法第5類、過去第1類の系列は矢印の向きが下から上に向かっていることが分かるが、それはすでに述べたように現在形を導くには $*y\ddot{a}t\ddot{o}e-m\ddot{a}r\ddot{a} \leq *y\ddot{o}et\ddot{o}e-m\ddot{a}r\ddot{a}$ という具合に、トカラ祖語において現在語幹には本来属さない $-ä-$ という母音を設定しなければならず、その場合 $-ä-$ は過去あるいは接続法語幹 $*y\ddot{a}t\ddot{a}- < *i\ddot{o}t-H-$ に由来すると思われるからである。

5. ゲルマン語における動詞系列 (Averbo) と現在7類の起源

ゲルマン語の動詞系列は第1類から第7類まで存在し、本論第1節でその特徴として不定詞の語根の形がそれぞれ 1. $CeiC-$, 2. $CeuC-$, 3. $CeRC-$, 4. $CeR-$, 5. $CeC-$, 6. $CoR-$, 7. $Coi/ou/o/eh_1-C-$ という構造を示すことを指摘した。その際第1類から第3類までの過去形と過去分詞形の $CiC--CiC-$ (第1類), $CuC--CuC-$ (第2類), $CRC--CRC-$ (第3類) という構造はトカラ語の過去第1類 Ia の過去形 $C(R)(i/u/R)(C)(H)-$ ($> urtoch. C(R)(i/u/\ddot{a}R)(C)\ddot{a}-$) および過去分詞形 $C(R)(i/u/R)(C)(H)-$ ($> urtoch. C(R)(i/u/\ddot{a}R)(C)\ddot{a}-$) と全く同じであることがわかる。

ゲルマン語の第1・2・3類の起源も従って $C(R)e(i/u/R)(C)-$ という構造を持つアオリスト語根であることが推測され、それらの語根の一つとしてインド・ヨーロッパ祖語の $*b^heid$ “spalten” のようなアオリスト語根が挙げられる。この語根からはゴート語の $beitan$ “beißen” ($< urgerm. *beit-$) のような第1類の動詞が造られている。このようにしてゲルマン語ではトカラ語と同様に第1・2・3類に関して $C(R)e(i/u/R)(C)- - C(R)o(i/u/R)(C)- - C(R)(i/u/R)(C)- - C(R)(i/u/\ddot{R})(C)-$ というパターンが成立し、後に現在語根でも音韻的にこのパターンに適合すれば第1・2・3類の動詞系列を形成したと考えられる⁶ (例: got. $biugan$ ($< *b^heug^h-$) - $baug$ - $bugum$ - $(ga)bugans$)。不定詞においてe階梯を示す第4・5類においてもそれぞれ $CeR-$, $CeC-$ という音韻構造を持つアオリスト語根によっ

てそれぞれ $C(R)eR- - C(R)oR- - C(R)\bar{e}R- - C(R)R-$ ($> C(R)u\bar{R}-$) (例: got. *qiman* ($< *g^u\text{em-}e/o-$) - *qam* - *qēmum* - *qumans*) および $C(R)eC- - C(R)oC- - C(R)\bar{e}C- - C(R)eC-$ (例: got. *saihan* ($< *sek^u\text{-}e/o-$) - *sah* - *sēhum* - *saihans*) というパターンが成立し、第1・2・3類と同様に同じ音韻構造を持つ現在語根にも及んだと考えられる (例: got. *wisan* ($< *h\bar{z}ues\text{-}e/o-$) - *was* - *wēsum* - *gawisans*)。

本稿が扱っている現在第7類についてはトカラ語過去 Ib2 の $C(R)\bar{a}(i/u/R)$ ($C(R)\bar{a}-$ ($< C(R)o(i/u/R)(C)-H-$) (Prt.Ib2) - $C\bar{a}-C(R)\bar{a}(i/u/R)(C)\bar{a}-$ ($< Co-C(R)o(i/u/R)(C)-H-$ (P.P.Ib2) のような -o- 階梯の現れる系列との比較が可能である。具体例を挙げると次のようになる:

$*koid\text{-}e-$: $k\bar{e}\text{-}koid\text{-}e-$ > got. *haitan* : *haihait*, *ahd. heizan* (*nhd. heißen*) : *hiaz*

$*stoud\text{-}e-$: $*ste\text{-}stoud\text{-}e-$ > got. *stautan* : *staistaut-*, *ahd. stozan* (*nhd. stoßen*) : *stiaz*

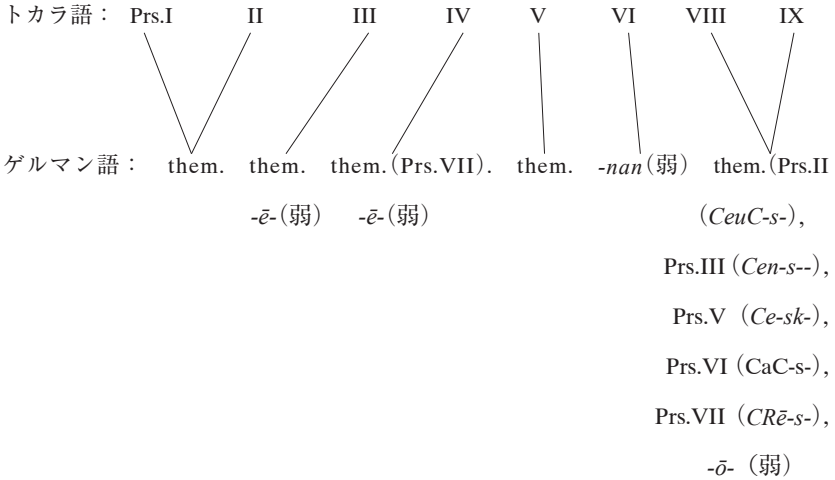
$*kold^h\text{-}e-$: $*ke\text{-}kold^h\text{-}e-$ > got. *haldan* : *haihald*, *ahd. haltan* (*nhd. halten*) : *hialt*

$*leh\bar{u}d\text{-}e-$: $*le\text{-}loh\bar{u}d\text{-}e-$ > got. *letan*. *lailot*, *ahd. latan* (*nhd. lassen*) : *liaz*

このように、第7類の不定詞語幹 (= 現在語幹) は第1類から第5類の語幹母音 -e- とは異なり -o- 階梯を示しているが、それはすでにトカラ語の現在第4類で述べたように他の時制・法の語幹、ゲルマン語では完了語幹に由来すると考えることが可能である⁷。

ゲルマン語の動詞系列をトカラ語のそれと比較すれば次のような図式が考えられるであろう:

印欧祖語：athem. *-e-/o-*them. *-o-*them. *-o-*them. athem. *n*-Suffix *s*-Suffix *sk*-Suffix



(z.B. toch. I A *pālkās* < *b^hlg-; toch. II B *parām* (< *b^her-e-) = germ. **beran* (> got. *bairan*); toch. III B *lipetār* (< *lip-o-*) (vgl. germ. **libēn* (> got. *liban*)); toch. IV B *korpotār* (< *kuorpH-o-) (vgl. germ. **hwerban* (> got. *hwaiban*), ahd. *harēn* (< *kos-oi); toch. V B *suwam* = germ. **keuwan* (> ahd. *kiuwan*); toch. VI B *pällātār* (vgl. got. *ga-wak-nan*, *us-bruk-nan*); toch. VIII B *ersām* (vgl. germ. **leusan* (< *leuH-s-) (= gor. -*liusan* (vgl. toch. B *lyewetār*)); germ. **ten-s-* (> got. -*þinsan*); germ. **pre-sk-* (> got. *þriskan*, vgl. aisl. *þryskva* (< *treskōn)); toch. B *auksitsi* < (*h²(e)uk-s-ie-) = germ. **wah-s-jan-* (> got. *wahsjan*); germ. **blē-s-* (> got. -*blēsan*))

6. おわりに

ゲルマン語において語根の音韻構造が動詞系列の成立にいかに重要な役割を担ったかは A *lyalyānku* (P.P.II) (< **lelenk-*): *lalānku* (P.P.III) (< **lelnk-*) のようなトカラ語の過去分詞の対と比較すれば明らかである⁹。トカラ語に対しゲル

マン語では **lenk* のような *CeRC* という音韻構造を持った語根は第3類以外に所属することは不可能である。それに対して、トカラ語では《非継続的・完了的》な Aktionsart を有する語根から過去第1類（語根アオリスト）、また《継続的・未完了的》な Aktionsart を有する語根から過去第3類（*s* アオリスト）が造られる点において、語根の音韻構造ではなく語根が有する Aktionsart が動詞組織の形成に一義的に結びついたサンスクリット語およびギリシア語と共通点を示すが¹⁰、他方、語根（特にトカラ祖語において新しく成立した *-tk*, *-sk* で終わる語根）の音韻構造は動詞過去形の類の所属に関して大きな役割を演じている。この点においてトカラ語の動詞組織の発展段階はサンスクリット語・ギリシア語とゲルマン語の中間段階にあり、従ってゲルマン語のそれはインド・ヨーロッパ語において最も新しい姿を示していると考えられる。

ゲルマン語現在7類に関しては、現代ドイツ語を例にとると、*heißen – hieß – geheißen* は *beißen – biss – gebissen* と比べ過去・過去分詞が長母音を示す点において異なっているが、この違いは後者がインド・ヨーロッパ祖語の *ei – i – i* という規則的な母音交代に基づいているのに対し、前者は *oi ← oi – oi* のように不定詞（＝現在語幹）が過去語幹の母音に基づくことに由来している。このことは *stoßen – stieß – gestoßen* のような *ou ← ou – ou* あるいは *halten – hielt – gehalten* のような *o ← o – o* という母音交代に基づく第7類の動詞にも当てはまるが、*lassen – ließ – gelassen* のような語幹の母音が *eh₁* に遡る動詞はその音韻構造が強変化第1類から第6類までの動詞には適合しないために第7類に帰属せざるを得なくなり、その結果類推により *lassen – ließ – gelassen* のような動詞系列（Averbo）が成立したと考えられる。これは上述したようにトカラ語においても *-tk*, *-sk* で終わる語根の音韻構造が動詞過去形の類の所属に大きく関与していることと同様の現象であると言える。

註

- 1 Bammesberger, Alfred: *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*, 1986, 106f.
- 2 トカラ語の現在第4類の起源に関してはこの類が Essiv に遡るという説も存在する。LIV² 2001, 25. しかし、この考え方には音法則的に無理があることが指摘されており、本稿でも Essiv 説は採らず、現在中動態すべての形において語幹形成母音 -o- が現れる考え方に従っている。Jasanoff, Jay H: “Stative” *-ē- revisited. In: *Die Sprache*, Wien, Vol 43,2 (2002-2003), 131f. また、中動態の語幹形成母音がすべて -o- を示すことについては下記参照: Jasanoff, Jay H.: 1978: *Stative and middle in Indo-European*. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 23), 56ff.
- 3 Saito, Haruyuki: On the Origin of the Reduplicated Preterite in Tocharian. In: *Tocharian and Indo-European Studies*, Vol.7 (1997), 158.
- 4 Krause-Thomas: *Tocharisches Elementarbuch*, Bd.I (Grammatik), 1960, 192f. 尚、トカラ語の過去形は第1類から第6類まで存在するが、第6類は B *kām* “kommen” - Prt.Sg.3 B *sem* “kam”, B *länt* “hinausgehen” - Prt.Sg.3 B *lac* “ging hinaus” の2つの語根に限られており、本稿の表には掲載されていない。
- 5 トカラ語の動詞系列における現在第3類、4類、5類、6類、7類と接続法第5類との一括的な対応は特筆に値する。本稿で扱っている現在第4類と接続法第5類の対応では接続法語幹および過去語幹の幹母音が現在語幹に取り入れられている。また、接続法および過去語幹から現在語幹への影響はこの場合に限定されていないが、本稿では上記の動詞系列 (Averbo) を強調するために矢印を用いた。
- 6 ゲルマン語およびトカラ語についてはそれぞれ下記参照:

Bammesberger, Alfred: *Einige e-stufige Präsentien des Urgermanischen und ihr Verhältnis zu indogermanischen athematischen Wurzelaoristen*. In: PBB Bd.102 (1980), 339f.

Saito, Haruyuki: *Das Partizipium Präteriti im Tocharischen*, 455f.

尚、類推に基づく言語変化における Muster の存在について H.Paul は次のように述べている:

Wie schon in Kapitel 1 hervorgehoben worden ist, attrahieren sich die einzelnen Wörter in der Seele, und es entstehen dadurch eine Menge grösserer oder kleinerer Gruppen. Die gegenseitige Attraktion beruht immer auf einer partiellen Übereinstimmung des Lautes oder der Bedeutung oder des Lautes und der Bedeutung zugleich. Die ein-

zelnen Gruppen laufen nicht alle gesondert neben einander her, sondern es gibt grössere Gruppen, die mehrere kleinere in sich schliessen, und es findet eine gegenseitige Durchkreuzung der Gruppen statt.

Paul, Hermann: *Prinzipien der Sprachgeschichte*, Fünftes Kapitel. Analogie, Tübingen, 1968, 106.

- 7 Meid, Wolfgang: *Das Germanische Praeteritum* 1971, 77. 彼は **ke-kold^h-e* → **kold^h-e*- (*got. haldan, ahd. haltan*) を想定している。トカラ語現在第4類との比較からも彼の考えは支持され得ると考えられる。
- 8 Ahd. *harēn* “rufen” < **kos-oi* がなぜ強変化第7類ではなく弱変化第3類に属するかはゲルマン語の重要な問題であるが本稿ではそれ以上扱わず次稿に譲りたい。

Lloyd, Albert L./ Lühr, Rosemarie: *Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen*. Band IV., 2009, 830.

- 9 ゲルマン語およびトカラ語についてはそれぞれ下記参照：

Bammesberger, Alfred: Einige *e*-stufige Präsentien des Urgermanischen und ihr Verhältnis zu indogermanischen athematischen Wurzelaoristen. In: PBB Bd.102 (1980), 339f.

Saito, Haruyuki: *Das Partizipium Präteriti im Tocharischen*, Wiesbaden, 2006, 416f.

- 10 Ramón, García: Indogermanische Wurzelpresentia und innere Rekonstruktion. In: Früh-, Mittel-, Spätindogermanisch (Akten der IX. Fachtagung der Idg. Gesellschaft in Zürich, 1994), 53-75, 54ff.

参考文献

Bammesberger, Alfred: Einige *e*-stufige Präsentien des Urgermanischen und ihr Verhältnis zu indogermanischen athematischen Wurzelaoristen. In: PBB Bd.102 (1980), 339-344.

—: *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*, Heidelberg 1986.

Jasanoff, Jay H.: 1978: *Stative and middle in Indo-European*. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft 23). Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft.

—: “Stative” *-ē- revisited. In: *Die Sprache*, Wien, Vol 43,2 (2002-2003), 127-170.

- Krause, Wolfgang/ Thomas, Werner: Tocharisches Elementarbuch, Heidelberg Bd.I (Grammatik), 1960.
- LIV² = *Lexikon der indogermanischen Verben. Die Wurzeln und ihre Primärstammbildungen* unter Leitung von Helmut Rix, zweite, erweiterte und verbesserte Auflage bearbeitet von Martin Kümmel und Helmut Rix, Wiesbaden, 2001.
- Lloyd, Albert L./ Lühr, Rosemarie: *Etymologisches Wörterbuch des Althochdeutschen*. Band IV., 2009.
- Meid, Wolfgang: Das Germanische Praeteritum, (*Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft* 3). Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft, 1971.
- Paul, Hermann: *Prinzipien der Sprachgeschichte*, Fünftes Kapitel. Analogie, Tübingen, 1968.
- Ramón, García: Indogermanische Wurzelpresentia und innere Rekonstruktion. In: Früh-, Mittel-, Spätindogermanisch (**Akten der IX. Fachtagung der Idg. Gesellschaft in Zürich**, 1994), 53-75.
- Saito, Haruyuki: On the Origin of the Reduplicated Preterite in Tocharian. In: *Tocharian and Indo-European Studies*, Copenhagen, Vol.7 (1997), 155-161.
- : *Das Partizipium Präteriti im Tocharischen*, Wiesbaden, 2006.